

大教会強盗

ジェイコブ・プラッシュ

イントロダクション

今回は 2 つのギリシア語に注目したいと思います。ひとつは“クレプトス (*kleptos*) ”で、新約聖書の中で“盗人”と訳される基礎単語です。またもうひとつは“ハルペーゾー (*harpazo*) ”で、これは“クレプトス”が行うこと——“力づくで取り去る、略奪する”ことです。ハルペーゾーは何かを略奪することであり、クレプトスはその行為を行う者です。(このクレプトスから“クレプトマニアク *kleptomaniac* [窃盗癖]”という言葉が来ています)

厳密に言って聖書中には“携挙 (*rapture*) ”という言葉が出て来ないとある人たちは主張します。しかし携挙という言葉は聖書中に**存在**します。それはハルペーゾーという言葉がラテン語に翻訳を行ったウルガタ訳から来た言葉です。“携挙”という言葉はハルペーゾーというギリシア語のラテン語訳から来たもので、確実に聖書中に登場します。一方でその単語は聖書の一箇所以上に登場しています。私たちはこれから新約聖書でその単語が登場する全ての箇所を見て行きます。それはその単語が使われている箇所がすべて携挙のことを教えているからです。私たちはこれをさらに展開して見てみましょう。

「ハルペーゾー」と「アナスタシス (*anastasis*)」を足すと「エピスナゴゲー (*episunagoge*)」になります。つまり「取り去られること」+「復活」=「(私たちが主のみもとに) 集められること」なのです。ギリシア語の“エピ(*epi*)”という接頭辞は“まわりに”という意味です。それゆえ言い換えると、携挙と復活は同時に起こるもの、イエスの再臨に伴う出来事の二つの側面であるということです。それが“エピスナゴゲー”というものです。またこれはイエス・キリストが来られるという啓示である“パロウシア (*parousia*) ”と機能的に同じものです。ですが“アポカリプス (*apocalypse*) ”という意味においての“啓示”ではなく、真実の信者が明らかにされるものです。“アポカリプス”は、“覆いを取り去る”ことを意味する啓示に関するもうひとつの言葉です。再臨は覆いを取り去ることではなく、瞬時に起こるのであり、最終的にすべての目が見るようになります。

実際の例

私にはイギリスでコンピューターのソフトウェア・エンジニアをしている友人がいます。彼は家族を持つ良い人で、ストーンヘンジの近くにある教会の長老をしています。彼は興味深い職種の仕事をしています。その人はコンピューター・コンサルタントでありながら、コンピューターシステムにハッキングするために、銀行やクレジットカード会社、法人などから雇われています。彼は実際に機密性の高い情報を盗むため、コンピューターシステムに侵入するために雇われています。その情報はたいてい金銭的な情報を含んだものであり、セキュリティの安全性を計るためのものです。彼が言うには中国の犯罪組織とロシアのマフィアが最も危険なハッカーであるようです。彼らはアメリカのギャングなどではなく、たいていの場合、旧ソビエト連邦 KGB（秘密警察）元エージェントらであり、修士号や博士号を持ち、多言語を扱う者たちです。もし彼らがコンピューターサイエンスの学位を持っていなければ、そのような者を雇って自分たちのためにハッキングさせます。彼はそのような問題が急増していると言います。そのために彼のビジネスは急速に成長しているのです。その人は盗人が行うのと同じこと——ハッキングし、情報を盗むということを行っているのです。

彼が会社内の人と契約を交わすと、彼がいつそれを行うのか、またどうやってやるのかを人に知らせることはありません。彼は追跡されることの無いように遠隔地である香港などを経由し、イギリスのシステムにハッキングするようなことを行います。これと同じことを専門的なハッカーは行っているのです。彼は本当の盗人が盗む前に情報を盗もうとします。それは彼が情報を盗むことが出来れば、本当の盗人に盗まれ得るからです。それゆえ本当のハッカーが盗みを行う前に、その盗み方を知ろうとするのです。言うならば、盗人から奪うという行為をしているのです。彼はこれで生計を立てています。彼はクリスチャンであり、クリップほどの物も盗んだことがありませんが、盗人と同じことを行っているのです。ですが彼はセキュリティシステムに潜り込むよう雇われています。

ハルペーパーを認識する

『そこで、イエスは、人々が自分を王とするために、**むりやりに連れて行こうと**...』

この箇所でもまたハルペーパー——**携挙する**という言葉が使われています。これは同じ言葉です。イエスは彼らのご自分を“携挙”しようとしていることを知っていました。

『こうしているのを知って、ただひとり、また山に退かれた。』（ヨハネ 6 章 15 節）

携挙が来るということに彼が気づいていたことは注目すべき事柄です。この同じイエスさ

まが、携挙が来るということを私たちに思い起こさせるのです。この単語を見る時、その箇所はいつも来るべき携挙について何かを教えてください。イエスは携挙が起こる前にそれが起こるという事実を知っていました。私たちはその日や時を知ることはありませんが、それが近づいて来ていること、また何が起こるかを知るようになります。

当然ながらここで人々は、イエスを王とするためむりやり連れて行こうとしていました。そして神の国がこの世のものでないため（王となることは第一の到来の目的ではなく、第二の到来における目的でした）、彼は携挙されて、ご自分が王となることをお許しになりませんでした。イエスは戻って来られて、その時にご自分を王となされます。言い換えると、彼らは**イエスさま**を携挙しようとしていましたが、本当は私たちが携挙するために彼ご自身がやって来られるということなのです。イエスさまは携挙が起ころうとしていることを知っていました。

文法的に言うところでは使われている言葉は未来の受動態——“ハルパゾマイ (*harpazomai*)”ですが、それは同じ言葉です。

誰によって取り去られるか

『盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。』

（“殺す”は“スーソ *thuso*”、“滅ぼす”は“アポレス *apoleso*”であり、この言葉から“アポリュオン”が来ています）

『わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。牧者でなく、また、羊の所有者でない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして、逃げて行きます。それで、狼は羊を**奪い** [*ハルペーゾー*]、また散らすのです。』（ヨハネ 10 章 10 節-12 節）

狼は彼らを“ハルペーゾー”——携挙します。イギリスにいる友人の話に戻ると、彼の仕事は盗人から奪うこと、盗人が情報を奪う前にそれを盗んでしまうことでした。その友人は盗人と同じことを行うのです。サタンはやって来てハルペーゾーします——彼らを携挙、力づくで奪い去るのです。

『わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを**奪い去る** [*ハルペーゾー*] ようなことはありません。...』

『...わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去る [ハルペーザー] ことはできません。』(ヨハネ 10 章 28 節-29 節)

これは私たちがキリストの御手の中にいるなら、サタンが私たちが奪い去ることは出来ないということです。サタンは新しい人に触れることができません。彼はキリストの御手から私たちが奪い去れないのです。

この聖書箇所は背教という問題については触れていません。人々は文脈を無視してこの箇所を引用し、文脈の中で正当化されていない意味を与えてしまっています。この箇所は誰も御手から抜け出すことはできないとは語っていません。これは単に御手から奪い去られることが無いと言っているのもあって、キリストの御手の中にいることを自分から拒否した人については何の関係もありません。この箇所が示していることは、人がキリストの御手の中にいることを自分から選んだのなら、誰もその人を奪い去ることは無いということなのです。

救われていない人たちは自由意志を持っていません。彼らの意志は縛られており—聖霊によって確信を与えられない限り、キリストを選ぶことはできません。未信者は強められ、キリストを選ぶ確信を与えられる必要がありますが、彼らが救われるためには神の仲介を必要とします。『わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません』(ヨハネ 6 章 44 節) 私たちは救いにおいて、キリストのもとに来た時に私たちの自由意志を取り戻します。キリストは私たちが力づけてくださらなければ出来ない選択を可能にくださるのです。自由意志は十字架において回復されました。自由意志は私たちが取り戻すものです。それによりキリストを選び、キリストのうちに留まることが可能となります。ヨハネ 10 章 28 節から 29 節は背教や個人の意志という問題には全く触れていません。この箇所はただ**盗人**が奪い去ることができないと書いてあるのです。非常に多くの場合この箇所は間違っ適用されてしまっています。

『御国のことばを聞いても悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪って行きます。道ばたに蒔かれるとは、このような人のことです。』マタイ 13 章 19 節

誰かが福音を聞き、確信を与えられ、救われたと分かったとします。誰も彼らを主の御手から奪い去ることはできません。しかし彼らがそれほど前に進んでおらず、その種が地に落ちず、まだ死んでいなければ次に何が起こるかを私たちは知っています。悪魔がその人

を奪い去ろうとしてくるのです。これが悪魔のやり口です。

私たちが伝道をする時、福音を伝え、その伝えた人がそれを信じ、日曜日に教会に来ると言ったとしましょう。しかし次の日にエホバの証人が戸別訪問にやって来たりします。そのような時、悪魔が彼らを遣わしているのです。これが蒔かれたものを奪い去ろうとする悪魔です。しかしマタイ 24 章には次のようにあります。

『しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れはしなかったでしょう。』（マタイ 24 章 43 節）

イエスは夜の盗人のように来られます。言い換えると、イエスは盗人から私たちが奪われるのです。イエスは悪魔の特徴を持って来られ、敵が私たちが奪う前に私たちが奪い去ってしまわれます。それはマスター・ガンビット（チェスで駒をわざと失い、勝利する方法）です——イエスは悪魔を自分のゲームで打倒されます。悪魔は“クレプトス”です。イエスはクレプトスではありませんが、クレプトスのようにやって来て、クレプトスと同じことを行います。言い換えれば携拳の性質を理解するためには、悪魔の性質を理解する必要があるということなのです。主は盗人から盗むためにやって来られます。

現代のクレプトス

それでは「盗んだり、殺したり、滅ぼしたり」するクレプトスについて見ていきましょう。それは悪魔がこれをいかになし、そこにおいていかに本性を現すかということについてです。すべての人が奪い去られます。ですが問題なのは誰が奪いに来るかということなのです。私たちは本当のクレプトスによって“ハルペーザー”されるか、クレプトスのような方によって“ハルペーザー”されるかのどちらかです。

詩篇 50 篇では国家の指導者が非難され、彼らに対して次のような言葉が語られています

『おまえは盗人に会おうと、これとくみし、姦通する者と親しくする。』（詩篇 50 章 18 節）

ここで語られている不正と不品行の關係に注目してください。奉仕者が恵みから落ちるとき、たいていの場合そこには靈的高慢、金銭的スキャンダル、性的不品行が關係しています。多くの場合これら三つのうちどれかが関わっており、ある場合にはスリーセブンの例もあります。また多くの場合女性と浮気をしているような人が、“信仰のこぼ

(*Word-Faith*)”を教えていたり、常習的に盗みをしていたりします。これは聖書に示されているように、古代イスラエルの時代から存在していた問題なのであって、何も新しいことではありません。

刑事事件で有罪判決を受け、同性愛の小児愛者であるトッド・ベントリー (*Todd Bentley*) という人物は 7 歳児への性的虐待で刑務所に入っていました。そのベントリーはクリスチャンになったと自称し、自分の体をタトゥーで覆い、年老いた女性の顔を足で蹴飛ばすような蛮行を行いました。そして毎晩、彼の礼拝に 1 千人の人が通うようになると主が示されたと言教し、その人たちが彼に 1000 ドル (約 8 万円) を与えるようになると語っていました。その後、彼はそのようなお金を得るようになり、一晩に 100 万ドル (約 8000 万円) を記録した夜もあったようです。長期間このような状況の中にあつたとき、彼は妻に対して誠実ではなかったにもかかわらず、リック・ジョイナー (*Rick Joyner*) や C. ピーター・ワグナー (*C. Peter Wagner*) らによって英雄扱いされていました。

そして彼が偉大なリバイバルを導くようになると預言を受けた 4 日後、彼は自分の妻と 3 人の子どもを捨てて、他の女と駆け落ちしました。その直後に自分の妻と離婚して、そのもうひとりの女と結婚したのです。その後になっても彼の支持者らはベントリーを再び奉仕に戻そうとしているのです。

『おまえは盗人に会おうと、これとくみし、姦通する者と親しくする。』(詩篇 50 章 18 節)

このような人物は姦通する者です！そして人々は彼に満足しています！これはただ現代の一例ですが、このような例は他にも多くあります。言い換えれば、そのような人たちはもうすでに騙されているのです。

『わたしがイスラエルをいやすとき、エフライムの不義と、サマリヤの悪とは、あらわにされる。彼らは偽りを行ない、盗人が押し入り、外では略奪隊が襲うからだ。しかし、彼らは心に言い聞かせない、わたしが彼らのすべての悪を覚えていることを。今、彼らのわざは彼らを取り巻いて、わたしの前にある。彼らは悪を行なって王を喜ばせ、偽りごとを言って首長たちを喜ばせる。彼らはみな姦通する者だ。彼らは燃えるかまどのようだ。彼らはパン焼きであつて、練り粉をこねてから、それがふくれるまで、火をおこすのをやめている。』(ホセア 7 章 1 節-4 節)

(もちろんパン種は罪と偽りの教えの象徴です)

この箇所を読んでみてください。彼らは姦通する者であり、盗人でした。しかし王や君た

ちは彼らの嘘を喜んでいたので—それが王を喜ばしていました！

なぜ著名な牧師たちや指導者たちはこのような詐欺師に信頼性を与えるのでしょうか。指導者たちは彼らの嘘を喜んでいて、指導者たちは彼らの盗みを喜んでいて、このために—神の裁きである—アッシリア捕囚が起きました。当時は北の十部族が取られましたが、現代の教会にも神の裁きをもたらしています。ローマ 11 章にあるように、神が台木の枝を惜しまれなかったとしたら、野生種である私たちをも惜しまれることはないのです。もしイスラエルのユダヤ人がそのような行為の結果から逃れることが出来なかったとすれば、教会が逃れることができるなんてことがあるのでしょうか。しかし人々は同じ行為を繰り返してしまっています。

トッド・ベントリーは彼の妻と子供のもとを去っているのに、人々は彼を奉仕に戻らせようとしています。このようなことは彼らにとって何の意味も持たないのです。彼らにとってお金だけが大事なのです。姦淫については気にもかけません。

『おまえのつかさたちは反逆者、盗人の仲間』（イザヤ 1 章 23 節前半）

その指導者たちは神に反逆しており、盗人の仲間なのです！

私はこれが本当に起こったことなのかと信じられないくらいショックでした。私はただこのような周知された情報を語っているのであって、人をけなそうとしているのではありません。私は事実を述べているだけなのです。

オーラル・ロバーツ (*Oral Roberts*) という人は 900 フィート (約 270 メートル) の背丈をしたイエス・キリストに会ったと言い、今月の終わりまでに 650 万ドル (約 5 億 2 千万円) を集めなければ殺すとイエスに言われたそうです。ジャック・ヘイフォード (*Jack Hayford*) のような人たちは彼を擁護し、誰かが (彼が建てた) 病院を救うために彼にお金を与えたようです (その病院も結局は閉鎖し、イエスさまは彼を殺しはしませんでした)。彼はテレビに出てきて、「お願いです。私は彼に殺されるのです」と泣きながら言っていました。彼が言うには 900 フィートのイエスが明らかに取り立てのような行為を行っていたのです—そのようなものはヤクザが行うことです。ですがこのような人物を擁護する牧師たちが実際に存在するのです。

『おまえのつかさたちは反逆者、盗人の仲間』（イザヤ 1 章 23 節前半）

イエスのご自分の父の家がいかに強盗の巣になってしまったかを警告しました (マタイ 21

章 13 節、マルコ 11 章 17 節、ルカ 19 章 46 節)。イエスさまはここで“クレプトス”という言葉を使いませんでした。クレプトスはハルペーゾーするからです。この箇所の意味しているのは詐欺師のほうです。

一方、悪魔であるクレプトスは盗み、滅ぼすためにやって来ます。イエスは敵と同じことを行うためにやって来て**敵のように**やって来ます。しかしその動機は完全に違ったものなのです。彼は**クレプトスのように**やって来ます。イエスさまがなされることを理解するためには、敵のなすことを理解する必要があります。本当のクレプトスはいつの時にも敵ですがイエスさまは**クレプトスのように**やって来られます。

パウロの例

今度は別の面を見てみましょう。この“ハルペーゾー”という単語が登場するすべての場面が携挙について何らかのことを教えています。

『論争がますます激しくなったので、千人隊長は、パウロが彼らに引き裂かれてしまうのではないかと心配し、兵隊に、下に降りて行って、パウロを彼らの中から**力**ずくで引き出し、...』

(ハルペーゾーする—**携挙**する、ギリシア語では同じ言葉です)

『兵營に連れて来るように命じた。その夜、主がパウロのそばに立って...』(使徒 23 章 10 節-11 節前半)

ペシエット (*Peshet*)、文字通りの一般的な意味はこのようなものです。パウロは捕らえられそうになりました。暴徒たちは彼を切り裂こうとし、文字通り引き裂こうとしていました。そこでローマの司令官は、パウロが引き裂かれる前に助けるため兵士たちを遣わしました。暴徒たちが彼をハルペーゾーする前にローマの千人隊長が、パウロをハルペーゾーしたことに注目してください。これが携挙の象徴です。反キリストはキリストの体を引き裂くためにやって来ます。『死体のある所には、はげたかが集まります』(マタイ 24 章 28 節) しかしそうなる前に私たちの司令官はご自分の御使いを遣わして、選民を集められます。敵がハルペーゾーを行う前にイエスさまが私たちをハルペーゾーされるのです。この単語が出てくる箇所はいつも携挙のことについて私たちに何かを教えています。私たちの司令官は、敵が私たちを引き裂く前に私たちを奪い去られます。救出が行われるのです。

いつも救いがある

『しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入られはしなかったでしょう。』(マタイ 24 章 43 節)

『その時、あなたの国の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民で、あの書にしるされている者はすべて救われる。』(ダニエル 12 章 1 節)

その書に名前が記されている者たちが救われるということに注目してください。この救いは今迫っており、この救いこそが携挙なのです。イギリスではジェラルド・コーツ (*Gerald Coates*)、またアメリカではリック・ジョイナー——という人たちが携挙を拒絶する教理を教え、その救いが無いと語っています。救い出されることが無いと信じているなら、どうやって救い出されることが可能なのでしょうか？

オリーブ山の訓戒 (マタイ 24 章など) でイエスさまは注目すべきしるしが何かを教えて言われました。「私は夜の盗人のように来ようとしている。それゆえこれらのしるしに目を留めなさい。これらのしるしを見ると私の到来がすぐに迫っていると分かる。盗人の来る時間を知っていたなら、おめおめと入られることは無いであろう。そうだ、私はちょうどその盗人のようにやって来るから」パウロが私たちに語っているのは、その日が私たちをクレプトスのように襲うことは無いということです (1 テサロニケ 5 章 4 節)。あっけに取られるのはこの世であり、背教した教会なのです。忠実な花嫁はあっけに取られることはありません。一方、マタイ 24 章でイエスさまは「目をさましていなさい。これらのしるしに目を留めるように。私は夜の盗人のようにやって来るのだから」と言われました (マタイ 24 章 42 節-43 節参照)。

フロリダ州オーランドにあるディズニーワールドに子どもや孫を連れて行くとしましょう。その時誰かが「警報装置なんて付けなくていいよ。明りを消しドアを開けたままでフロリダに行き、楽しんできたら良いじゃないか」と言ったなら、誰がそんなことを実行するのでしょうか？そんなことを言う人を誰が信じようとするのでしょうか？リック・ウォレン (*Rick Warren*) のウェブサイト、また『人生を導く 5 つの目的』では終わりの時代に関する預言を避けなさいとあります。終わりの時代の預言が私たちを本来の道から反らせるものだからだということです。イエスさまは目を覚ましていなさいと言われ、ご自分が盗人のように来られるため警戒していなさいと言われました。しかしもしリック・ウォレンの言うこと

を信じたら、誰がイエス・キリストの言うことを気にかけるでしょうか？人生を導く嘘を信じたなら、誰が新約聖書を必要とするでしょうか？イエスは私たちに警戒するように教え、これらのしるしに目を留めるように**命令しました**。しかしウォレンはそうするなど言います。彼が誰のために働いているか皆さん分かるでしょうか。彼は盗人——強盗のための働き人となっているのです。

これはただの“間違い”ではありません。明らかに意図的なものです。イエスがあるひとつのことを教えようとされているのに、ウォレンはその反対を教えています。これは信じ難いことですが、このようなことが現実には起こっているのです。

パウロの個人的な例

『私はキリストにあるひとりの人を知っています。この人は十四年前に——肉体のままであったか、私は知りません。肉体を離れてであったか、それも知りません。神はご存じです、——第三の天にまで**引き上げられました**。』(2 コリント 12 章 2 節)
(ハルペーゾー——携挙)

パウロは肉体のままであったか、肉体を離れてであったか分かりませんでした。私たちが携挙される時も、私たちが死んでいるかどうか分からないでしょう。ただ私たちが分かるのはキリストにあって生きているということだけなのです。

古代ギリシア人たちは三つの天という概念を持っていました。第一のものは地球の大気圏であり、第二は宇宙空間、第三は永遠でした。ギリシア語においては“時間”を表す言葉が二つあります。“クロノス (*chronos*)”と“カイロス (*kairos*)”です。“カイロス”は時計のようなものですが、永遠においては進み続ける時計は存在しません。永遠では時計は存在すらしらないのです。しかし永遠において“クロノス”は存在します。ここから英語の“クロノロジー(年代記)”という言葉が派生しています。それは出来事の順序を意味するものですが、時間の外において起こることです。たとえば黙示録において小羊は世の初めからほふられているとあります(黙示録 13 章 8 節)。ヨハネは黙示録で「そして私は見た...また私は見た」と語っています。しかし彼は未来の出来事を過去形で語り、過去の出来事を現在形で語っています——そこに“カイロス”は無く、ただ“クロノス”だけがあるのです。そこには時間の外で起こる出来事の**順序**があります。時計のような時間は第二の天(宇宙空間)、惑星運動に依存しているのです。

厳密に言えば粒子の放出によって動く時計があり、惑星運動で動くわけではありませんが、それでも 10 億分の 1 秒単位でしか測定できず、惑星運動の測定結果によって時間を示す他

に手段はありません。

したがって黙示録やゼカリヤ書を読むと“シャマイム (*shamayim*)”——“天 (*sky*)”が巻かれたとあります。それは永遠が地上と出会うという意味です。時間と空間が天に出会うのです。それが“第二の天”が“巻き上げられる”ということです。

『私はこの人が、——それが肉体のままであったか、肉体を離れてであったかは知りません。神はご存じです、——』

パウロがこれを二度繰り返したことに注目してください。それは奥義だからです。それが起こった時、彼はそれが理解できませんでした。

『パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いたことを知っています。』(2 コリント 12 章 3 節-4 節)

パウロは携挙——“ハルペーゾー”され、携え挙げられたのです。これは携挙がどのようなものであるかを教えています。その時、私たちは自分たちが死んでいるのかを知ることはありません。私たちはただ生きているということだけを知るのでした。私たちは肉体の中にあるのか、肉体の外にあるのかも知ることがないのです。

いつでも地上への帰還がある

『水から上がって来たとき、主の霊がピリポを連れ去られたので、』

(...ハルペーゾーされた、携挙された...)

『宦官はそれから後彼を見なかったが、喜びながら帰って行った。それからピリポはアゾトに現われ、すべての町々を通して福音を宣べ伝え、カイザリヤに行った。』(使徒 8 章 39 節-40 節)

興味深いことに、パウロが“ハルペーゾー”された時に彼は再び地上に戻り、ピリポが“ハルペーゾー”された時も、再び地上に戻りました。携挙の後にはキリストの千年間の支配があります。誰かが“ハルペーゾー”されると、いつもきまってその人は地上に戻って来ています。それは片道切符ではなく——往復切符であり、墮落以前の状態の地球に帰って来るのです。

このことをいつも覚えておいてください。誰かの寿命があと残り 6 カ月だとしても、その人の寿命は実際 1 千年と 6 カ月であるということです！信者は眠りにつき、そして再び目を覚まします。死はただ救われていない人たちのものです。

使徒 8 章 39 節でピリポは“ハルペーゾー”され、人々は彼を後に見ることがありませんでした。それはエノクが天に引き上げられ、人々が彼をもう見ることはなかったのと同じことです。

『次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、』

（“ハルペーゾー”）

『空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。』（1 テサロニケ 4 章 17 節-18 節）

「携挙」という言葉は聖書には無いと言うのを私は聞いたことがあります。“ハルペーゾー”ならどうでしょうか？“ハルペーゾー”という単語は聖書中に何度も登場し、それが出てくる箇所はいつも第一テサロニケ 4 章 17 節について何らかのことを示しています。

生誕物語

『女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖をもって、すべての国々の民を牧するはずである。その子は神のみもと、その御座に引き上げられた。』（黙示録 12 章 5 節）
（“ハルペーゾー”）

他の教えで以前に説明したように、この箇所は生誕物語の“ペシェル (*Pesher*)”的な解釈です。マリアから生まれたイエスをヘロデは殺そうとしましたが、イエスは神の助けによって救い出されました。ヘロデがやって来て他の子どもたちを殺したように、この竜は女に怒って、女とその子孫の残りの者たちに戦いをしかけます。これがクリスマス物語（と呼びたいならばの話ですが）のペシエルの解釈です。一方でこれは未来の出来事でもあります。それはイエスがエジプトに逃れたように、この男の子も神とその御座に引き上げられるからです。

それゆえハルペーゾーが起こり、いつでも救いが存在します。パウロの文脈ではそれは救

いでした。竜がその男の子を奪い去る前に神が彼を奪い去ってしまわれます。暴徒たちがパウロを奪い去ってしまう前に、神は摂理によって司令官を通してパウロを引き上げさせました。これらの文脈はいつも救いと関係があります。ですが救い出されることが無いと考えていたなら、どうやって救出が可能なのでしょうか。

切断

『主の日は夜中の盗人のように』

（“クレプトス”）

『来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。』（1 テサロニケ 5 章 2 節）

“主の日”がエピスナゴゲーをもって開始するということをよく心に留めておいてください。教会が取り去られると神は反キリストの王国に御怒りを降り注がれます。それが“主の日”であり、それが突如としてやってくるのです。

“携挙”と同じもうひとつの言葉（少なくとも“携挙”と同義語として使われているもの）は“コロボー (*kolobo*)”——“切断”というもので、『もし、その日数が少なくされなかったら』（マタイ 24 章 22 節）というものです。

転移しやすいガンを体の末端部分や臓器に抱えている場合、その人は他の器官にガンが転移してしまう前に外科的な切開が必要となってきます。また末端部分に壊疽などを抱えていたなら、体全体が死に至るのを防ぐために切断手術が必要不可欠となってきます。これが将来起こることです——キリストの体の悪い部分が切り離されるのです。切断手術が行われます。体全体が死んでしまう前に悪い部分は切断されます。聖なる民を打ち砕くことが起こるとき（ダニエル 12 章 7 節）、忠実な教会の苦しみは短くされます。忠実な教会は神の御怒りを経験することはありませんが、迫害は経験します。しかしその迫害はその“切断（コロボー）”によって短くされるのです。この言葉は終末論において重要な言葉です。

ちょうど盗人のように

1 テサロニケ 5 章はただ盗人のように来るというのではなく、“ちょうど盗人のように”やって来ると書いています。悪魔はどのように働くのでしょうか。イエスさまはちょうど同じようなことをされます。イギリスの私の友人の話に戻ってみると、ハッキングされる側の

人たちは盗まれるということを知りもせず、彼がどのようにするかさえも分からず、いつそれが行われるかさえも分かりませんでした。彼は店が閉まっているが、システムが稼働している午前 2 時半にハッキングしたり、アジアやアフリカにある他のコンピューターを介して遠隔地から侵入したりします。ハッキングされている側は全く見当が付かないのです。その箇所は“ちょうど”盗人のようにとあり強調されています。

『しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。』(1 テサロニケ 5 章 4 節)

その日が盗人のように私たちに襲うことがありませんように！人が終わりの時代の預言を無視していたり、そうするようリック・ウォレンやその仲間たちから教えられていることを考えると、私はゾッとします。

『しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。』

(またここも“クレプトスのように”です)

『その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。』(2 ペテロ 3 章 10 節)

ここでの“万象”という言葉はギリシア語で“ストイキア (*stoichea*) ”というもので、ここから“化学量論 (*stoichiometry*) ”という言葉が来ています。それは初歩的な化学や原子などの周期表などのことです。古代ギリシア人は原子を知っていましたが、亜原子粒子や素粒子物理学などを知りませんでした。彼らや陽電子や電子、ニュートリノ、陽子などについて知りませんでした。“原子”——“アトモス (*atomos*) ”という言葉を持ち、「それ以上分割できないもの」という意味を持たせていました。原子がそれ以上小さくなるということを知らなかったために、彼らにとってはそれが最小の物質だったのです。20 世紀まで人々は原子が分解され得ることを知りませんでした。しかしこのガリラヤ出身の漁師は原子が分解され得ると言うだけでなく、それにより生物圏が破壊されると語ったのです。これはプルトニウムやコバルト、ウラン 238 の臨界質量が知られるはるか以前でした。これは驚くべきことですが、これがギリシア語本文で実際言われていることであり、元素が分解され得り、その元素は目に見えないものであるが生物圏を破壊できるほどの爆発的なエネルギーを放つということなのです。

『「わたしが、それを出て行かせる。——万軍の主の御告げ——それは、盗人の家に入り、また、わたしの名を使って偽りの誓いを立てる者の家に入り、その家の真ん

中にとどまり、その家を梁と石とともに絶ち滅ぼす。』(ゼカリヤ 5 章 4 節)

これは飛んでいる巻物——ヘブライ語で“メギラー (*megilah*) ”に関する箇所です。それは盗人の家に入り、その家を絶ち滅ぼします。

過去、深刻な偽りの教理を教えるおかしい教会において、主の御霊により聖書の意味が明らかになったことによって、そこから主に連れ出された人は皆さんのうちでどれくらいいるでしょう。これがその盗人の家に入って行く巻物です。お金やエキュメニズムなどについて説教するおかしい教会には、何の責任も無い人たちがいます。彼らはただそのようなことだけを教えられてきたので、他のことは何も分からないのです。私自身は“神の子たち (*The Children of God*) ”というカルトの中で救われました。私が最初信じていたようなことは全く信じ難いことでした。しかし私が知っていたのはそういうことだけだったのです。それがおかしいと私は知りませんでした。そのような教会には何も知識が無い人たちがいます。そのような人たちは無知なのです。私は無知でした。とはいえ巻物は盗人の家に入って行くのです。

『だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出さない。それを堅く守り、また悔い改めなさい。』

“サルデス”はギリシア語の“サルクス (*sarx*) ”——“肉による”という言葉から来ています。それは真理をある程度まで聞いて、知っていた教会です。

『だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出さない。それを堅く守り、また悔い改めなさい。』(黙示録 3 章 3 節)

ここで対象となっている人たちはかつて真理を知っていた人たちです。彼らは目を覚まし、自分たちが聞いたことを思い出すよう警告されています。

昔は誠実であり、聖書の真理に堅く立っていた教会があります。ほんの数十年前まではバプテスト派教会の中に非聖書的なものを見つけることは困難でした。ペンテコステ派教会で聖書的でないものを見つけるのは困難だったのです。私はたった 30 年前のことを言っているのです。彼らは確実に真理を聞いていたのですが、盗人の到来には準備が出来ていません。

『——見よ。わたしは盗人のように来る。目をさまして、身に着物を着け、裸で歩く恥を人に見られないようにする者は幸いである——』(黙示録 16 章 15 節)

イエスさまは繰り返し、ご自身が盗人のように来られることを語られています。

テレビ伝道者やその種の愚かさに巻き込まれている人たちはすでに“盗まれて”います。宗教的詐欺師によって一文無しになったビジネスマンを私は知っています。ここで私が語っているのは宣教や誠実なミニストリー、キリスト教慈善活動にお金を寄付することではなく、詐欺師のことで、彼らの羊を搾取しているのです。しかしそれよりも敏腕な盗人が到来しようとしています。人が明らかな偽預言者を見抜けない場合、本当の“偽預言者”が来たときにはどうなってしまおうでしょうか。もしコソ泥兼テレビ伝道者を見抜ければ、**本当の詐欺師が現れたときにはどうなってしまおうのでしょうか。**

どちらの盗人か

イエスは盗人のように来られます。彼は盗人から私たちが奪ってしまわれるのです。イエスさまは私のイギリスの友人が行っていることと全く同じことを行われます。イエスさまは盗人と同じように振舞われ、盗人が盗んでしまう**前に**その盗みをやってのけるのです。**すべての人が“ハルペーゾー”されます。すべての人が奪い取られ、すべての人が力づくで奪われます。**唯一の問題は誰にハルペーゾーされるかということなのです。

クレプトスは**殺す**ためにハルペーゾーします。クレプトスのように来られる方は**救い**のためにハルペーゾーされます。

クレプトスは**滅ぼす**ためにハルペーゾーします。クレプトスのような方は救出するためにハルペーゾーされます。

クレプトスは自分のものでないものをハルペーゾーしようとやって来ます。クレプトスのような方はご自分の血によって自分のものとなった者たちのためにハルペーゾーされません。

クレプトスは死をもたらすためにハルペーゾーします。クレプトスのような方はいのちをもたらすためにハルペーゾーされます。

クレプトスは盗むためにハルペーゾーします。クレプトスのような方は回復するためにハルペーゾーされます。

いずれにせよ**みな**がハルペーゾーされます。あなたはハルペーゾーされるし、私もハルペ

ーザーされます。あなたの家族もハルペーザーされるし、私の家族もハルペーザーされま
す。あなたの教会もハルペーザーされ、私の教会もハルペーザーされます。すべての人が
ハルペーザーされるのです。唯一の問題は、誰にハルペーザーされるかということです。

私たちはハルペーザーされることについて選択肢はありません。私たちが選べることとい
えば誰によってハルペーザーされるのが良いかということです—クレプトスか、クレプ
トスのような方によるかのどちらかです。その日が盗人のように私たちを襲うことがあつ
てはなりません—その日が盗人のように私たちを襲ってはいけません。

祝福がありますように。†††